目次

a man with NO mission ③

２１　鏡の中（860字）
２２　上の階の住人（867字）
２３　追憶の殺人（681字）
２４　高原デート（335字）
２５　火事（662字）
２６　分かれ道（88字）
２７　犬を介した再会について（1241字）
２８　オフィスサプライ（1268字）
２９　天地反転（632字）
３０　耳垢（678字）

イラスト・いぬ36号

21 鏡の中

洗面台で髭抜きをしているとき、男はふいに不穏なものを感じた。何かおかしいと思って鏡を覗き込むと、そこに映った自分の姿が自分自身の動きに対応していないことに気がついた。

ありえないと思った瞬間、鏡の中の自分がこちらに手を伸ばしてきた。手が鏡をすり抜けて飛び出してきたのだ。男はあっと驚いて目をつぶった。目のすぐ上辺りを掴むようにされたと思った次の瞬間、ガムテープを勢いよく剥がすような音がした。

「眉毛はもらったぞ！」

我に返って鏡を見ると、そこには眉毛を片方なくした自分が映っていた。

男はしばらく片眉で過ごした。新しい眉毛はいくら待っても一本も生えてこなかった。眉毛が片方しかない顔はいかにも締まりがなく、そのせいでたびたび決まりの悪い思いをすることとなった。男は一生この顔で過ごさなければいけないのかと思い悩んだ。

数ヶ月後のある朝のことだった。

洗面台で髭抜きをしているとき、男はまたしても不穏なものを感じた。もしやと思って鏡をよく見ると、そこにいたのはあのときの男だった。そいつは男から奪った眉毛を自分の片方の眉毛の上に張りつけ、憎たらしげににやりと笑った。異様な顔だった。

男は盗られたものを取り返そうとして、本能的に鏡の中に手を伸ばした。鏡の中の男の方が一瞬早かった。男は手を払いのけられ、今度は鼻に掴みかかられた。栓が抜けるよ

うな音がして何かが引っこ抜けた。鼻だった。

その途端、男は激しい羞恥心に襲われた。眉毛が片方しかないのはまだ耐えることができる。しかし、鼻がなければどうにもならなかった。鼻なしの顔など恥さらし以外の何物でもなかった。

「はっはっは！　お前の鼻はもらったぞ！」

鏡の中の男はそう言って右に消えていった。

男は逃がしてたまるかと鏡の中に飛び込んだ。思ったようにすり抜けることはできなかった。男は鏡に勢いよくぶつかり、床に落ちた。鏡は無残にひび割れてしまった。

男はやがて惨めな気持ちで立ち上がると、震える手で水をすくって顔を洗った。鼻があった部分から凹凸がなくなってしまい、指が滑り抜けるような変な感じがした。

22 上の階の住人

夜中だった。男は部屋の玄関ドアががちゃがちゃ鳴る音で目を覚ました。酔って帰宅した上の階の住人が、階を間違えてドアを開けようとしたのだ。

以前にも何度か同じことがあった。男は寝ぼけまなこで玄関へ行くと、階を間違えていることをドア越しに伝えた。

ドアノブを回そうとする音がやんだ。数秒の沈黙のあと、ドアの向こうの相手が玄関から離れていく足音が聞こえた。ず、ず、と引きずるような音だった。

数日後の夜中、またしても男は部屋のドアを開けようとする耳障りな音に眠りを妨げられた。

やはり上の階の住人だった。男は同じようにドア越しに対応した。また、ず、ず、と引きずるような足音が遠ざかるのが聞こえた。

同じことが何度か続いたあとだった。またしても部屋のドアを開けようとする音に起こされた男は、今度こそ面と向かって文句を言ってやろうと布団から飛び起きた。

勢い込んで玄関に向かい、鍵を開けてドアノブに手をかけた瞬間だった。男は唐突にあること思い出した。忘れていたことが信じられないくらい重大なことだった。

階を間違えているのはドアの向こうの相手ではなかった。男の方だったのだ。

ドアの向こうの相手こそ、実は今男がいる部屋の本当の住人だった。そして、男こそが

上の階の部屋の住人だったのだ。

あんなに苦労して入れ替わったというのに忘れてしまうなんて――。男は自分の愚かさを呪った。

鍵を閉め直すにはもう遅かった。ドアは予想外の力強さで外から開け広げられた。男は抵抗を試みたが、無理やり廊下に引きずり出されてしまった。

すかさず、黒い影が入れ替わりに中に入り込んだ。ドアは男の目の前で閉ざされ、重い施錠音が廊下に響いた。

いくら叩いても反応はなかった。男はしばらく粘ったが、やがて諦めてドアに背を向けた。

階段をのぼる足取りは重かった。上の部屋に帰りたくなかったのだ。あの部屋には何か出るからだった。男は見るからにつらそうな様子で、壁に手をついてのぼっていった。

一段ずつゆっくりとのぼりながら、男は明日になったらまた部屋を替わってもらえないか交渉してみようと思った。たぶん夜中に。

23 追憶の殺人

ある夜、男は終電に近い私鉄の駅でホームの端をふらふら歩くスーツの中年男性を見かけた。かなり酔っているようだった。

電車が入って来ると、男は引き寄せられるようにしてその見ず知らずの相手に近づいていった。そして、何を思ったか、すれ違いざまに背中を肩で強く押したのだった。

中年はバランスを崩してあえなく線路に落下した。直後に急ブレーキの音が響いた。周囲に他に人はなく、男は振り返ることもなくその場を去った。

ほんの出来心だった。中年は轢死し、男は捕まることもなかった。

数年後、そのときのことはどちらかと言えばいい思い出として男の中で記憶されていた。なぜそんな風に記憶しているのか、自分でもよく分からないくらいだった。

あるとき、男は付き合いが深まりつつあった女と英国式庭園が見えるレストランに出かけた。ゆっくりできる窓際の席だった。結婚を申し込むつもりだった。

食事中、二人の間には常に笑いが絶えなかった。絶品のバジルソースのパスタに気をよくした男は、ふと数年前の駅での出来事について話しはじめた。
女は興味津々で話にうなずき、男も興に乗った。最後の部分まで話し終えると、二人で一緒に笑い合った。

男はプロポーズを切り出す前にいったんトイレに席を立った。用を足している間も上機嫌で、いい返事をもらえると確信していた。

席に戻ると女がいなくなっていた。彼女もトイレかと思い、男はエスプレッソのおかわりを注文した。自分のした話の余韻に浸りながら、男は一人にやけてそれを飲み干した。

三杯目を飲み終えたところで、男はようやく女がもう戻らないのだということに気がついた。男は四杯目を注文した。

24 高原デート

初めてのデートで高原に牛を見に行ったときのことだった。男は自信満々で恋人に言った。

「好きな動物、当ててやろうか？」
「え？」女は不意打ちをくらったように言った。
「牛」
「違うけど」

会話はそれきり途絶えた。

二人は売店にソフトクリームを買いに行った。搾りたてのミルクで作った濃厚な一品だった。450円した。

男は遠くの牛を眺めながら、しばらく押し黙ってソフトクリームを舐めた。やがて、自ら沈黙を破った。

「分かった、羊だ」
「違うし。何決めつけてんの。バカじゃない」

その言い方にかちんときた男は、恋人の顔にソフトクリームを押しつけ、ぐりぐりした。相手の顔がべったりと、真っ白になった。

「お前、オペラ座の怪人みたいだぞ」

男は声をあげて笑うと、恋人を置き去りしてレンタカーで帰っていった。

25 火事

ショッピングモールで買い物をしていたとき、男は突然腹を下した。お昼に食べたものが当たったのだ。

あわてて近くのトイレに駆け込むと、個室はすべて埋まっていた。空くのを待っている余裕はなかった。男は大急ぎでフロアの反対側にあるトイレに向かった。

「避難した方がいいな」

すれ違いざまに誰かが言うのが聞こえた。その言葉に続くようにして、他の買い物客たちがぞろぞろと出口に向かいはじめた。

火事だって。その中の誰かが言った。

男はちょうど人波に逆らうような格好になった。むしろ都合がよかった。これなら絶対にトイレは空いているはずだ。

「そっちはダメだ！」

誰かに呼び止められたが、構っている余裕などなかった。もう出かかっていたのだ。

男は脂汗をにじませながら、トイレマーク目指してテナントを突っ切って走った。

思った通り、トイレには誰もいなかった。男は便座に座ると同時に大量の便を放出した。際どいところでセーフだった。

ふおお、むう。

誰もいないと思うとつい声が出てしまった。少し間を置いて第二弾と第三弾が出ると、ようやく危機は去ったように感じた。

男は大きく息を漏らし、その場でぐったりとなった。

ふと見ると、備えつけのサイドボードに雑誌が読み捨てられていた。

何気なく手に取ると、男の好きなゴシップ記事満載の週刊誌だった。おまけに袋とじも未開封だった。男はほくほく顔でアイドルの密会記事から読みはじめた。

すぐに夢中になり、次に気がついたときにはもう手遅れだった。

翌日、男は焼け焦げた週刊誌を手にしたままの状態で消防隊員に発見された。袋とじは開けられていた。

26 分かれ道

一本道を進んでいくと、道が二手に分かれていた。

右の道は地獄行きと案内が出ていた。

左の道には案内はなかった。

男は左の道を選んだ。

地獄よりもっと悪かった。

それが新たな基準となった。

27 犬を介した再会について

男は今でも小学生のときの苦い記憶を思い出すことがあった。

ある日、一緒に遊んでいた同級生のＦが目の前で犬に咬まれたのだ。自分と同じくらい大きな体をした凶暴な野良犬だった。

男は怖くなって、泣きわめくＦを見捨てて逃げたのだった。Ｆは腕に十針以上縫う大怪我をした。

後にも先にもあんなに怖い思いをしたことはなかった。

その一件のあと、男は例の野良犬以上にＦの存在を恐れるようになった。Ｆと目が合うと、あのとき逃げたことを責められているような気がしたのだ。自分の意気地のなさを。

男は、残りの学校生活をＦを避けるようにして過ごしたのだった。

それから二十年以上が経った今でも、男の心には当時のことが引っ掛かっていた。

ある日、男は一言謝りたいという抜き差しならない思いに駆られて衝動的にＦを訪ねた。本当はずっとそうしたかったのだ。

今も実家で暮らしていたＦは、突然の訪問に面食らい、いくらか警戒した様子で門扉越しに対応した。

それも最初だけのことだった。男が昔のことを謝りたいと言うと、相手の態度も心なし和らいだ。

ところが、門扉を開けて敷地に通してくれたかと思うと、Ｆは突然態度を翻した。敵意もあらわに男を罵りはじめたのだ。

卑怯者。根性なし。お前のせいで大怪我をした。お前のせいでおれは不具者だ。一生が台無しだ。

男はすっかり萎縮して批判されるままになった。どれだけ責められても当然の報いだと思った。

突然、Ｆが勝ち誇ったような笑い声をあげた。もしやと思って振り返ると、男の後ろに放し飼いの大型犬がいた。罠にはまったのだ。

大型犬は今にも咬みつきそうな様子で牙を剥き出しにして唸り、飼い主の命令を待ち構えていた。

「このときを何年も待っていたぞ。この傷の恨みを忘れるはずがないからな。そいつは羊を何頭も噛み殺したこともある凶暴なロットワイラーだ。今こそ復讐を果たしてやる。行け、ソルティ！」

Ｆは犬をけしかけてきた。

男はわっと目をつむり、飛びかかってきた犬を無我夢中で払いのけた。

宙を舞った犬は、庭の隅にあるDIY用具がまとめられた一角に突っ込んだ。板や工具が大きな音を立てて犬の上に崩れ落ちた。

犬はそれらを自ら押しのけて立ち上がったが、その胴体には芯材で使うような鉄の棒が二本突き刺さっていた。犬はなおも立ち向かってこようとしたが、もう脚が言うことを聞かなかった。

Ｆは犬に駆け寄り、歯軋りしながら男を振り返った。

「おれに何の恨みがあるんだ！」

男はうろたえて許しを乞うた。決してこんなことをするつもりではなかった。

Ｆは絶対に許さないとわめきながら殴りかかってきた。男は甘んじて殴られながら、ただひたすら頭を下げた。

Ｆは何度も殴った。途中からは角材を使って殴った。

次第に、男はいくらなんでもやりすぎだろうという気持ちになって、思わず一発殴り返した。

Ｆの歯が折れた。

Ｆは血相を変えて再び掴みかかってきた。

男は今度は受けて立った。二人は狭い庭先で上になり下になりの大乱闘を演じた。

そうこうしているうちに犬は死んでしまった。

28 オフィスサプライ

昼食から戻ると、男はさっそく午後の仕事に取りかかった。書類がきちんと規定に沿っているかどうかを確認する単調な業務だった。

はかどりはじめた頃、デスクの隅に押しやるように置いてあった水色のテープカッターが男にもそもそ語りかけてきた。

「たまには埃くらい拭いてくれよ」

昔ながらの重量のある卓上型テープカッターだった。男はまさかと思って手を止め、辺りを見回した。こんなものが喋るはずがない。

同僚たちはそれぞれ自分の仕事に従事しており、誰も話しかけてきてなかった。でも、まさか。

男はそっと手を伸ばし、テープカッターの水色のボディを指先でつついてみた。反応はなかった。指の関節のところで軽く叩いても反応はなく、少し持ち上げて揺すってみても同じことだった。

「そうじゃねぇよ。掃除だよ、掃除」

男は驚いて声をあげそうになった。やはりこいつだったのだ。しかも、なんだか品の悪い感じだ。

男は少し腰を浮かせて重い台座を両手で掴むと、テープカッターを目の前に持ってきた

。椅子に座り直して、そのどっしりとしたボディを改めてじっくり眺めた。

埃をかぶっていることはときどき目についていたが、掃除をしたことなど一度もなかった。

数年前の配置換えでこのデスクを使いはじめたときから置いてあったものだが、業務で使う機会がほとんどないせいもあり見て見ぬふりをしてきたのだ。

よし、一丁やるか。

男は軽く腕まくりをし、デスクの一番上の引き出しから使い捨てのお手拭きを取り出した。

男には、喫茶店やファミレスでもらったお手拭きを使わずに持ち帰って溜め込む癖があった。何ヵ月も放置して乾燥させてしまうのがいつものオチだったが、今こそ役に立つときが来たのだ。

男は開封したお手拭きを指でつまみあげると、もしやと思って一瞬それを見つめた。これも喋るかもしれないと思ったのだ。

残念ながら、お手拭きは喋らなかった。

それでも、男はこのときのために自分はお手拭きを集めていたのだと何か合点が行くところがあった。

男はテープカッターの拭き掃除をはじめた。いったんはじめてしまうと、もう隅々までやらないではいられなかった。

お手拭きはすぐに真っ黒になり、二袋目三袋目と開けなければならなかった。使用済みのものは足元のゴミ箱に捨てた。

リールを外して溝の部分を掃除することも忘れなかった。もちろん、リール自体の汚れもきれいに落とした。

男はお手拭きを惜しまず、ひたすら丹念に部品を磨いた。磨きながら、セロテープとテープカッターの単純で無駄のない構造に思いを馳せた。

これを考えた人間は天才に違いない。

結局十枚以上のお手拭きを使った。すべて終わったときには、テープカッターは新車のような輝きを放っていた。

男は満足げな表情でそれを愛でると、その文具が何か言うのではないかと思って少し待った。もしかしたら、お礼か何かを。

テープカッターは何も喋らなかった。

少し残念に思ったが、男はこれでいいのだと自分を納得させた。それからその文具をもとのデスクの隅に戻した。

ちょうど終業を知らせる音楽が流れた。男は爽やかな気分で職場をあとにした。

29 天地反転

目を覚ますと、首から下が土に埋まっていた。おまけに天地が逆さまになっていた。

男は天を埋め尽くした地面の底に、頭を下にして突き刺さるようにして埋まっていたのだ。眼下には底なしの空が広がっていた。重力だけはもとのままだった。

男はついにこのときが来たと思った。長い間、予感だけはあったのだ。

見回すと、他にも大勢の人々が土から頭だけを出して下向きに垂れさがっていた。すべて予言通りだった。

男は予言を繰り返し唱えながら、時が満ちるのを待った。

風が地表をなで、近くに埋もれたものたちの髪がそれになびいた。男はある髪の長い女に視線を引きつけられた。

よく見ると、それは女ではなかった。マネキン人形だった。男ははっとなって他のものたちを見回した。みんなマネキン人形だった。騙されたのだ。

男は大声で助けを求めた。誰も来てくれないことは分かっていると思うと、声は余計に大きくなった。

そのとき、声の振動が伝わって近くの土が剥がれ落ちた。そこに埋まっていたマネキンが、土と一緒に眼下の無限の空間に落ちていった。

男はあっと口をつぐみ、マネキンが音もなく小さくなっていき、ついには見えなくなってしまうのを最後まで見送った。

男はもう声を出さなかった。

やがて、また別のところで土が剥がれ落ち、マネキンが一体こぼれ落ちていった。それも見えなくなったかと思うと、次だった。

男は脱出しようと体をもぞもぞ動かしたが、土が崩れそうになったのですぐにやめた。もはや時間の問題だったが、できることは何もなかった。

30 耳垢

「ちょっとこっち来て」

男は心なし浮き立った声で女を呼んだ。見たこともないほど大きな耳垢が取れたのだ。

女が部屋の戸口のところに姿を現した。何か作業を中断してきたらしく、ゴム手袋をはめたままだった。やらなきゃと言っていた風呂場の排水溝の掃除かもしれない。

「耳垢、すげーでかいのが取れた」

男は耳垢の乗ったティッシュを手のひらに乗せ、得意気に女に見せた。

女は汚れがつかないように手のひらを外側に向けて腰に手を当て、すがめた目をちらりとティッシュに向けた。

「で？」女が言った。

で、と言われてもこれだけだった。でかい耳垢。男はもっとよく見てと言うように、手をもうひと押し前にやった。

女は感情のこもってない目でティッシュを一瞥すると、ものも言わずに行ってしまった。

男は、女のその態度にまた何か間違えてしまったらしいと気がついた。「捨てるから」男はあとを追うようにして言った。

しかし、一人になって改めて耳垢を前にすると、やはり捨てるには忍びないという気持ちが沸いた。それほどの大きさだった。

その日、男は耳垢の乗ったティッシュを机に広げたままにして布団に入った。

翌朝目が覚めると、男は真っ先に机のところに行った。ティッシュはそのまま置いてあったが、肝心の耳垢は消えてしまっていた。

男は焦って辺りを見回した。耳垢はどこにもなかった。這いつくばって床をしらみつぶしに探したが、見つかるのはゴミだけだった。

風に舞うとか虫に食べられるとかしてしまったのだろうか。男はしばらくくよくよ考えた。はっきりしたことは何も分からなかった。

午後になって、男はようやく女にあれは捨てたと報告した。